認知症で語り始めた戦中、戦後の暮らし

沖縄戦を体験 母の生涯熱演

認知症がきっかけで、それまであまり口にしなかった戦争体験や戦後の暮らしを語り始めた奥浜カヅさん（故人）を題材にした演劇「カヅさんのひとりごと」が27日、尼崎市立立花北生涯学習プラザ（同市塚口町3）で上演された。演じたのはカヅさんの長女で、アマチュア劇団「LK表現の会」代表の奥浜恵子さん(61)＝同市。孫の深優さん(24)が奏でる三線の音色とともに、沖縄戦で家族を失い、生活苦の中でも懸命に生き抜いた母の一生を熱演した。（池田大介）

アマ劇団・奥浜さん「母の戦争 終わっていない」

尼崎

太平洋戦争末期の1945年4月、米軍が沖縄本島に上陸。当時、8歳のカヅさんは母親や兄、近くの住民とともに着の身着のまま避難した。海から飛んでくる艦砲射撃を避けるため、天然の洞窟を使った防空壕に隠れた。繊細な母親は壕の奥には入らず、入り口で待機していたが、場所が悪かった。飛んできた爆弾の破片が尻に突き刺さった。その後、米兵に見つかり捕虜となった。翌日、母親はベッドの上で冷たくなっていた。

「うちは8歳やで。8歳。泣けへんかったな」

カヅさんは捕虜収容所から脱走し、近隣住民と合流。船乗りの父親が戻って来るまで、住民や後に合流した兄とともに過ごした。戦後は親族の下ででっち奉公し、糊口をしのいだ。通学する余裕はなかった。

姉の料亭で働いていた18歳の頃、「大阪の沖縄料亭で働かないか」と声をかけられた。披露していた三線や歌を買われてのことだった。人生で初めての本州だが、不安はなかった。

「小さい時からあっちこっち行って働いとったからな」

大阪の料亭で勤めていた時、同郷の男性客と結婚。子ども2人にも恵まれたが、生活は苦しかった。琉球空手の師範だった夫は、定職に就かず稽古に熱中。知人と道場を開くも、微々たる月謝さえ家庭に入れることはなかった。

子どもを育てるため、カヅさんは週6日、朝から晩まで病院で働き、家事も全て1人でこなした。「任せとき」が口癖で、貧しいながらも子どもたちが必要なランドセルや文房具は必ず買い与えた。恵子さんが高校生の時も「お金は何とかするから」と短大の学費も工面した。働きに出ない夫にも文句一つ言うことなく、定年まで黙々と働き続けた。

「子ども2人産んだけどな。あんたと合わせて3人育てたようなもんや」

□ □

定年後もホームヘルパーをしながら、仕事終わりには必ず孫の深優さんの面倒を見に訪れた。2人がよくした遊びは、カヅさん考案の「苦労性」。五十音が描かれたパズルを裏返し、先に「く」を引いた方が負けという遊びで、カヅさんが「く」を引き当てる確率は高かった。「ばあちゃん苦労してきたからかなぁ」と深優さんは笑う。

元気だったカヅさんだが、夫と飼い猫2匹を相次いで亡くすと、目に見えて気力を失っていった。物忘れや思い込みも激しくなり、病院で認知症と診断された。

恵子さんは介護のため、深優さんらとカヅさんの自宅に移り住んだ。だが、病状は悪くなる一方で、身ぶり手ぶりを交えた独り言が増えた。中でも沖縄での日々やこれまで一切言わなかった夫への愚痴が多く、感情をあらわにすることも少なくなかった。

「豆腐屋のおばあはどうしてるかな」「子どもがおれへんかったらな、とっくに別れてるわ」「長男戦死、次男も戦死」

ある日の夜、カヅさんはベッドに腰かけながら、目を押さえていた。「どうしてもお母さんの顔が思い出せないんや…」。8歳の時は泣かなかったのに、子どものように声を上げて泣いていた。恵子さんは「カヅさんの中では戦争は終わっていない」と痛感した。

独り言が始まってから、恵子さんはカヅさんに質問することが増えた。戦争体験や沖縄での日々、夫との出会い…。ほとんどが初めて知ることで、聞き取った内容を大学ノートに記した。このノートを基に書き上げたのが「カヅさんのひとりごと」だ。

□ □

2017年の初公演では、観客から「勇気をもらえた」「頑張ろうと思った」と声が上がった。反響は予想以上だったが、新型コロナ禍の影響で公演が相次いで中止となった。

昨年11月、カヅさんは86歳で亡くなった。やせ細り、決して安らかな死ではなかった。それでもその表情から「人生を生ききったたくましさ」を恵子さんは感じ取ったという。

今回はカヅさんが亡くなってから初めての公演。深優さんが奏でる三線の音色が響く中、恵子さんはカヅさんになりきって、戦中戦後を語った。最後は、2人で三線を弾きながら、沖縄民謡「うちなー」を歌い、幕を閉じた。

「サバニ、白浜、忘りぐりしゃ。沖縄、沖縄、我が生まり島」

公演を終えた深優さんは「ばあちゃんの人生を知ってもらえてうれしい」とほほ笑んだ。恵子さんは「カヅさんは困難から逃げずにその日その日を生きてきた。劇中の母親の姿を通してこれからも元気を与えていきたい」と話した。

爆弾の破片で母親犠牲／でっち奉公から大阪へ／週6日働き家事も

㊧1960年代半ばの奥浜恵子さんとカヅさん（右）。沖縄県の実家に帰省した際に撮影（奥浜恵子さん提供）
㊨沖縄県の伝統衣装を着る（左から）カヅさん、深優さん、恵子さん（奥浜恵子さん提供）

深優さんの三線に合わせ、母のカヅさんを演じる奥浜恵子さん（左）＝尼崎市塚口町3

(C)神戸新聞社 無断転載 複製および頒布は禁止します。